

シンポジウム企画の背景

なぜ今、ウイルスベクター強化戦略なのか

【背景】

- ① 遺伝子治療の時代。近い将来、医薬品の3分の1は遺伝子治療薬に置き換わると言われています。遺伝子治療の主要技術がウイルスベクターです。
- ② 欧米ではウイルスベクター研究が大きく進展。遺伝子治療薬が相次いで開発・承認されています。難病が治るようになりました。
- ③ 日本が欧米に引き離されているのは基礎研究不足が原因です。わが国の遺伝子治療細胞学会の会員は増えているとはいえ500人ほど。米国の同様の学会の会員は6,300人。

【群馬大学の強み】

- ④ 群馬大学のウイルスベクター開発研究センターは、ウイルスベクターに特化したわが国初の研究機関です。
- ⑤ 世界最先端のウイルスベクターを開発し、他の大学・研究機関に供給する研究機関を「ウイルスベクターコア」といいますが、同センターはわが国最大のウイルスベクターコアです。同センター長で大学院医学系研究科の平井宏和教授の最先端ウイルスベクター開発力は日本一です。平井グループが他大学・研究機関に供給するウイルスベクターの件数は、年間200を超えており、わが国の生命科学・遺伝子治療研究に多大な貢献をしています。

【日本が遺伝子治療で巻き返す戦略】

- ⑥ わが国が遺伝子治療研究で巻き返しを図るには、研究のすそ野を広げるとともに研究を加速させる必要があります。医薬品開発の前提となるのは、新規ウイルスベクターを開発して特許を取得することです。
- ⑦ 欧米とは違った切り口で、わが国が独自のウイルスベクターを開発して遺伝子治療に結びつける余地は残されています、今なら間に合います。巻き返しは、新規ウイルスベクター開発力日本一の群馬大学が牽引しなければできないと考えています。